

久我の肖像画なども含め、西洋美術館保管の一次資料に立脚したものだが、その一般向け公開も鶴首される。さらに朝鮮出身の画家、林群鴻（1912—1979）が、ほぼ同時代に世界を遍歴したパステル画家、矢崎千代二（1872—1947）と北京で深い親交を紡いでいた事績は、申校正が発掘した。横田香世の矢崎研究の近著と相互に補う新知見であり、この時期の地球に「移り棲む」芸術家の交流を彷彿とさせる。こうした国境を跨ぐ原史料発掘からは、新たな「全球的美術史」構築への糸口が見え、「越境と往還」を超えて双焦点楕円軌道のスパイラル螺旋を描く、コスモポリタンな知の全球的気象学・地質動態学が眺望される。

＊東京大学駒場キャンパスで開催された同題のシンポジウム、024年9月20—21日に取材した。登壇者全員の発表には言及できておらず、また発言者の敬称は割愛した。学術上未刊行の話題への言及は慎み、既に公開されている情報に限定して私見を加えるに留める。なお本稿はPhilippe Junod, *Chemins de traverse, essais sur l'histoire des arts* (inFOLINO, 2007) 巻末論文「ザリガニ称賛」「Éloge de l'écravisse. Pour une histoire relativiste」の卓見に負う。

・ゴッホ・ゴーガン等の優品が僅少なことに着目した。だが当時の国家買い上げ規則や政治状況に照らせば、この三人の遺作を集中的に買い上げるのはもとより無理。同時代美術館館長レオンス・ベネディットにそこまでのVerschiebungを断行する裁量権は期待できない。もとより外国人ゴッホには、仏国籍者と同等の扱いなど行政的にもあり得ない。次世代のピカソも外国人無政府主義者の嫌疑を受け、主要作品が1914年頃から「没収」措置を蒙っていた。そうアニー・コーエン＝ソラルは指摘する。

そもそも英国の批評家ロジャ・フライ提唱（1910）のPostimpressionismなる枠組みに仏蘭西行政当局が同調する謂れはなく、1956年初版のジョン・リウォルド『脱印象派史』を議論の準拠枠にするのは時間軸を遡及する時代錯誤。リウォルドの前著『印象派の歴史』（1946）も含めて、ピエール・フランカステルは、特定の流派＝集団を論点先取で固定する「逸話集積」文献学は「歴史研究」とは無縁、と難詰していた。

20年代のフランス美術行政の凡庸さを嘆いたひとり矢代幸雄がある。陳岡めぐみはその傍らで松方幸次郎の近傍にあった久我貞三郎（1886—1959）の事績とパリ日本人会周辺の国際的な人脈とを詳細に解明した。「反動」の元凶のひとり、モーリス・ドニによる

生成の形象として生命の樹とも親和性をもつ。鈴木禎宏はバーナード・リーチの《生命樹》鉄絵紋タイルが漢代中国の画像石から直接着想を得て、そこに東西文化の融合を託した事情を敷衍した。とかく中国美術の専門家は時代と領域を越境する西洋伝播や中国外との文化往還には無関心。だが、Global Art Historyへの探求には、人類の遺産を共有するための方法論を模索する責務があるろう。

生命の樹はユング流の元型論に還元される危険の傍らで、例えば金沢百枝が現地調査した南イタリア・オトラント大聖堂の巨大なモザイク床絵に見える図像研究とも、錯綜を見せる。金沢はそこにアーサー王肖像が銘記されていることから、地中海のマルタにおよぶノルマン遠征の余波をこの作品に確認し、そのうえで従来生命の樹としての読解では割り切れない、複数の「蔓に束縛される人物」の表象に注目する。質疑で高野禎子も示唆したが、そこには「知恵の樹」の原罪の寓意も重ねわせとあって、樹木形象が教会身廊を相互往還する動態が濃厚に漂う。

教会荘厳の発注や寄進にも明らかだが、現存する作品の形成過程には同時代から後世にいたる政治状況が関与する。小泉順也は20世紀前半のフランス公立の美術蒐集に、「脱印象派」を代表するセザンヌ・ファン

越境と往還 ——美術史研究の諸相—— 連載263 イメージの遍歴と「夢の作業」、きたるべき知の気象学的・地質学的動態学への予感を込めて

稲賀繁美
京都精華大学特任教員・
放送大学客員教授

今道友信の初期の代表作に『同一性の自己塑性』が知られる。「同一性」はdas Eineであり、その意図は「一者」たる絶対神の化身avatarに関する哲学的洞察だろう。記号signがsinge猿やcygne白鳥へと変貌を遂げるアンドレ・マッソンの素描。その「化身」変貌の分析に松井宏美はソシール言語学の「恣意性」概念を援用する。だがこれは言葉遊びというより、アンドレ・ブルトンのいうhasard objectif「客観的偶然」としてのmetamorphoseと見るべきでは？ 真言宗や神道の言霊論では記号の変容に「まこと」の顕現を見る。夢における加工作用を分析したフロイトの用語VerschiebungとVerdichtungつまり「すり替え」と「圧縮」の作用もマッソンのイメージの生態学には有効だろう。「すり替え」はドイツ語では転売による闇取引や地層の断層も意味し、「圧縮」ともども地質学的想像力を喚起する。

その題名はさて置き、『脳は眠りで大進化する』（文春新書）で上田泰己はレム睡眠が促進するシナプス形成を非レム睡眠が収束整理に努め、両者の相互交替が、覚醒時の「探求」を睡眠時に記憶形成の「選択」に導くという。この仮説は、津田一郎のカオス・アトラクター理論との交錯の夢へと門外漢を誘う。

睡眠中の脳の活動・シナプスの作用はまた、イメー